

No. 2779



# 教育ルネサンス

[先生] 第5部 育つ 育てる 2

# 児童数24人へき地校で実習

先生を目指す都会出身の女子大学生が今月、北海道東部のへき地学校へ実習で訪れた。全校児童24人の小学校。子どもたちと向き合った、忘れられない2週間となった。

タンチョウが舞う鶴居村にある下幌呂小学校。昼休みに、全学年の児童が体育館に集まってくる。全員参加のドッジボールだ。実習中の北海道教育大3年の佐々木智絵さん(21)もジャージ姿で参加し、一緒に走り回った。

へき地学校 「へき地教育振興法施行規則」に基づき、交通機関や生活施設などから離れた学校が指定される。全国の公立小中学校の9%(2022年度)にあたり、北海道では36%を占める。赴任希望者を増やそうと、北海道教育大学では、志願制のへき地校実習を行っている。



児童とドッジボールで遊ぶ佐々木さん(17日、下幌呂小学校)―福元洋平撮影

## 濃密に向き合った2週間

上級生が下級生にルールを説明する。ボールが当たった1年生に、6年生が心配そうに声をかける。まるできょうだいのような。子どもたちのつながりが強いな」と、ほほえましい気持ちで見守った。

### ■複式学級の難しさ

小さな学校の難しさも実感した。2学年の児童が計16人以下の場合に作ることでできる複式学級では、先生1人が2学年分の授業を受け持つ。3・4年生計6人の複式学級で、実習3日目から授業を任された。

教室の前方を向いた4年生は国語ドリル、後方向きの3年生は教科書の物語文を読む。3年生に問いかけ



室では湿度を保つため、人数分のぬれタオルをつるす。4年の長田優吾君(9)は欠席者の分もタオルを用意し、下校時には同級生のランドセルをロッカーから出してあげていた。「優しいんだね」と声をかけると、長田君は顔を赤らめた。

下幌呂小の先生たちは「優吾君」などと子どもを下の名前で呼ぶ。児童も、先生も、学年に関係なく、声をかけ合う光景が日常だ。

### ■忘れられない原点

実習最後となった17日には、全学年の子どもたちが次々と声をかけてくれた。児童に促されて教室に戻ると、黒板に「2週間ありがとうございました」と書かれた文字。長田君ら3、4年生全員で書き上げたものだ。プラスチック板に絵を描いた手作りアクセサリーをプレゼントしてくれた。「大事にするね」と、佐々木さんは涙をぬぐった。

放課後には先生だけの慰労会があった。「この実習は忘れられない原点になると思う。ぜひ先生になってほしい」。指導役を務めた藤野和明教諭(49)からのエールを受けた。

### ■深い関わり求める

生まれ育った札幌市で通った小学校は、1クラス35人ほどだった。他学年の子や先生と話す機会は少なかった。大学の授業でへき地校を知り、「少人数だからこそその深い関わりがあるのでは」と思っ、実習を希望した。

下幌呂小の児童6人のクラスでは、子どもたちの動きや表情がよく見えた。教



複式授業を行う佐々木さん。写真手前の4年生は教室の前方を向いて、背中合わせの3年生は教室後方の黒板に向かう(16日)